

【書評】

楠原俊代著『韋君宜研究』

(中国書店、2016 年 2 月)

田畑 佐和子

一、本書の成り立ち

本書の内容は前編と後編の 2 部に分かれ、前編は『思痛録』の全訳、後編は著者・楠原俊代の韋君宜論考となっている。著者によれば、本来『思痛録』の翻訳を出すつもりだったが、日本では韋君宜の知名度が低いこともあり、出版が難しかった、そこで韋君宜についての論考を加えて刊行助成を申請し、学術図書としてやっと刊行を果たしたのだという。その結果一般読者に『思痛録』の翻訳が読めるようになったが、手がるに入手しにくい厚さと価格になった。付記すべきは、この前編・翻訳部分には、訳者の大変な苦勞が注がれていることだ。『思痛録』には数種の版本があり、初版は北京で出て、次に香港版が出たのだが、北京と香港の版の文章にはかなり違いがある。本書の訳文は香港版を底本にしつつ、北京版と異なる部分を字体で示すなど緻密な作業を行っている。また全文にわたり非常に多くの詳細な注を付している。単なる訳書でなく韋君宜の研究書として、精根をこめた翻訳である。

後編は著者による韋君宜についての 5 篇の論考が、5 章の形にまとめて収められている。さらに韋君宜の詳しい年譜が付され、韋君宜研究にそそいだ著者の熱意が伝わってくる内容である。

二、前編・『思痛録』とは

まず前編・『思痛録』原著の内容を紹介する。『思痛録』は 1998 年に北京の十月文芸出版社から出た韋君宜著の単行本で、北京で出たのが奇跡と言いたいほどの「危ない」内容をも含んでいる。韋君宜自身長いこと、この原稿が中国で活字になる日は来ないかもと危惧していたらしい。しかし彼女は最期の病床では、熱い望みを本書の出版に懸けており、出版がからくも存命中に実現したのは、親族友人たちの奔走の結果及び政治の風向きのおかげの他に、天が味方したとも言いたくなる。98 年出版の本書は、この年の中国「十大好書」の第一位（選者は各分野の 50 人の著名な文化人）に選ばれるなど大きな反響を呼び、売り切れで版を重ねた。その内容は 1940 年代からほぼ 2000 年までの中国の現代史を、各時期の共産党の政策を中心に振り返り、そこに自分自身の人生を重ねて回顧したもの、即ち現実の歴史の記述ではあるが、すべて韋君宜自身の経験した「真実」に基づいた、題名通り「痛み」を伴った回想録である。

全体は 16 章で、第 1 章の延安時代以後、2 章は建国初期の諸「運動」、3 章「胡風批判」、4 章「反右派闘争」、5 章「大躍進」、6 章「反右傾運動」、7 章は一人の「右派分子」の話、8 章「文革」前夜、と共産党が発動した「運動」を記述。9 章以下は、主に文革に振り回される人々と自分、社会の諸相を書く。文革中に横行したインチキ・デタラメを暴く筆致は容赦なく鋭く、また特に文革後期の夫や自分について語る文は深い痛みと思索とを湛えている。まずは本書の最も重要な章、韋君宜が最初に書きおこしたという第 1 章について、やや詳しく述べたい。

三、第 1 章「抢救失足人」について

第 1 章の原題（中国語）は上記の通りで、この 5 文字を訳せば「足を踏み外した者を緊急救助する」となる。具体的には、誤って共産党を裏切り国民党または日本の方に寝返った人を、急いで見つけて救い出す、という意味だ（日本語にない漢字言葉をそのまま使いたくないが、この語はきわめて特殊な歴

史的内容を持っているので、例外として使用する)。略して「抢救」とも言われるこの運動は、1940年代に始まる延安整風運動に続く、その究極の到達点とでもいうべき「スパイ摘発運動」で、43年夏をピークに自白の強要、冤罪の捏造などの横行で人々を恐怖に陥れた。韋君宜の夫であり、生真面目な黨員であった楊述も、スパイの嫌疑で拘禁され自白を強要されたあげく、ついに全く架空の「スパイ活動」の話を捏造して「自白」し、やっと釈放されたのだった！

韋君宜が回顧録を書くにあたり、まず真っ先に「抢救運動」を書こうとしたのはなぜか。それは、延安とその周辺に疫病のように蔓延したこの「運動」を、当時経験した人、被害を受けた人、それで家族や友人を失った人はたくさんいるのに、その後誰一人これについて語りもせず、いわずや書くことなどしなかったからで、その長く恐ろしい沈黙を、彼女は破ろうとした。実は『思痛録』の前に韋君宜は『露沙的路』(1994年出版)という自伝的小説を書いて、この運動の記述にかなり頁を割いているのだが、『思痛録』ではさらに踏み込み、人名地名など一切を実名に戻し、事実の記録として公表しようとした。この運動についての公式記録などはほとんど破棄または隠蔽されているため、資料は非常に乏しい。高華『紅太陽是怎样昇起的』(香港中文大学、2000年)には、「周知の如く、延安整風時期の中共中央政治局、書記処、中央社会部、中央組織部の檔案文献は、ごくわずかの物を除き大部分は今も公開されていない」とある¹。韋君宜はおそらく大部分を自分の記憶(とメモ?)で書いたのだろう。

大勢の無実の犠牲者をだした延安「抢救」の一幕が、その後堅く隠蔽された最大の原因は、運動の終息後、毛沢東が人々の面前で軍隊式敬礼をしてこの運動の誤りを謝罪したことであった。彼はこの運動のすべては自分の責任だとして、最も積極的にスパイを「製造」し冤罪を着せた康生を庇い、彼の責任には全く触れなかった。すなわち、この運動の全責任を負う自分がこうして謝罪するのだから、もう皆もこの運動の「誤り」を許し、忘れろ、ということで、それは謝罪というより口封じに他ならない。当時韋君宜も集会の場でこれを毛の口から直接聞いた。そして人々がその後は口を緘して、じっと沈黙を守るのを確かに見た。彼女自身も、(夫以外)家族親族の者にさえ、ずっとこのことを話さなかった。

以後半世紀も、公然とこのタブーに触れた者はなかった——韋君宜が『露沙的路』の中で書くまでは。この小説が出たこと、書いた韋君宜が人民文学出版社社長という重職にある高級幹部だったこと、その身に何もおこらなかったことで、「抢救」の事実が以後どのくらい解禁・公開されたのか——私の知る限り韋君宜に続く書き手はすぐには出てこなかった。上述の高華の本が2000年に(中国でなく香港で)刊行されるまでは。だから韋君宜は、あえて「抢救」を冒頭の1章として「真実」を書こうとしたのだ。長く秘密の闇に隠されていたからこそ、初めて露わにされた「抢救」の多くの具体例は生々しく、恐怖と驚きとを呼び起こす。

延安整風、特に「抢救」の運動には、それ以後に繰り返された過ちの原型がある、と韋君宜は考えていたと思われる。まずそれは、権力を握った毛沢東の、独断的な思考と行動が起こした運動であった。この独裁者を名指しすることには韋君宜にもまだ恐怖とためらいがあったと思われるが、この人物が以後くりかえされる「運動」の張本人だと韋君宜が見定めたこと、さらに「抢救」に見られる、無実の者に無理やり「自白」させ「冤罪」を着せるやりかたが、この後引き継がれて文化大革命にまで拡大・反復されることも、読む者に伝わってくる。

四、ひき続く「運動」

抗日戦及び国共内戦に勝利した後の共産党は、次つぎと内部から敵をつまみだして罰する「運動」を起こした。胡風批判、反右派闘争、反右傾闘争……と韋君宜の身边にも「批判・闘争」の津波が押し寄せる。延安時代、韋君宜夫妻は「冤罪」被害者の苦しみを嘗めたが、建国後の韋君宜は「上司」の身分

に出世していたので、部下の人間を闘争の対象として突き出すという加害者の役割も勤めねばならない。韋君宜の言い方によれば、「吊るしあげられる人間から吊るしあげる方へと変わった」のだが、実は「他人をやっつけながら、同時に自分が批判される」という、より複雑な苦しい立場になったのだ。『思痛録』の大きな特徴は、この板挟み状況の中で自分がやってしまった「過ち」をも、具体的に詳しく叙述し反省していることだ。すなわち、反右派闘争の時はあやうく「右派」にされるところを、自分と夫のコネを動員してなんとか逃れたことも書くが、一方では上からの圧力で、無実と知りながら部下に罪を着せ「右派」のレッテルを貼り、その人生に大きなダメージを与えたことも書いている。

韋君宜は自分がやむなく罪を着せてしまった人には、後に出来る限り直接「謝罪」をしたことを書き、さらに「謝罪だけにとどまらず、自らのあんなデタラメな思想の根源を深く掘り下げねばならない……そうしなかったからこそ、謝罪をしても次にまた同じ過ちを犯してしまったのである」と反省している（72 頁）。話が先走るが、もしも文革後に人々が、自分が罪に陥れた犠牲者の一人一人について真実を公にし、謝罪し、その名誉回復に力を尽くしていたら、どれだけの人の苦しみがより早く取り除かれたことか。

韋君宜が反右派闘争時の自分の経験として書き付けたある事実が、特に私の目を引いた。1961 年に、明らかな事実誤認で「右派」とされたある人につき、韋君宜たちがその間違いを上部に述べて「右派」の罪名取り消しを求めたところ、突如党中央から、「再審査の要求を（所属する組織が）受理することを禁ずる」という通知が来たというのだ（111 頁）。これ即ち、一旦右派と判定されたらもう再審査・名誉回復の望みがないという宣告であり、「右派退治」がそれ以前の反革命鎮圧や三反・五反などより一段と厳しかったことを示す。この無慈悲な「通知」の存在を、具体例をあげて書き留めた彼女の記録の価値はきわめて大きい。

「右派退治」に続いたのは、「大躍進」「人民公社」そして全国に及ぶ大飢餓の災厄であり、それに続く「反右傾運動」の、またも繰り返される「摘発」であった。大躍進時期、韋君宜は生真面目な幹部として、農村に下放し、身をもって「躍進」の現場を体験する。それらは汗と涙、感動と興奮に充ちた体験であったが、結局すべてはインチキであり、水田作りや製鉄はみなムダに終わった。農村では集団食堂を作って「共産主義」を謳歌したが、幻はたちまち消えて飢餓が国中を襲った。韋君宜は書く、「誰が悪いのか、騙したのは誰か。百姓自身が騙され、また騙したが、結局犠牲になったのは百姓だ」。そして彼女は自分も含め皆がこの時期、「どうかしていた」と繰り返す。「反右傾」なる運動が起こされ、農村の実情を見てそれを話題にした者は皆、「右傾機會主義分子」の罪人とされた。韋君宜も「右傾言論」の罪で作家協会代表を罷免された。彼女によれば、「反右派闘争」では主として知識分子がやられたが、「反右傾」では対象は全人民に及んだという。しかしあまりにひどい現実を目前に、党は「七千人大会」（1962 年）を開き全国から集まった人々に不満を吐き出させ、また「反右傾」のすべての罪状は帳消しで檔案から抜き去る、と決めた（ただし彭德懷だけは例外として罰せられた）。1962 年ころ飢餓は一息ついたが、秋には「小説を利用して反党する」という犯罪？が摘発され始める。これも新たな「冤罪」製造のタネとなり、韋君宜も含め多くの作家がこれにひっかかった。この手で『海瑞罷官』『三家村札記』などがやられて、文化大革命への道を開いたことはよく知られている。

五、文化大革命

9 章以降は文革時代に入る。文革初期には、韋君宜は吊るしあげ、暴行、監禁などにより一時期「正常な精神を失った」。娘の楊団によれば、ほぼ 3 年間彼女は入院生活または重病人として看護されて過ごし、自分について全く記憶がない期間がある、という。自分が受けたひどい暴力や心身の傷などをあま

り語っていないのは、そのせいもあるのだろうか。文革の理不尽と暴虐が書き込まれたのは、10 章「当代人の悲劇」で、ここでは夫・楊述の受難が詳述されている。一筋に党と毛沢東を信じ、母親はじめ全家族をこぞって「抗日・革命」の道に導いた楊述は、党の命令に従順な「盲従の」党员だったが、文化大革命に到って「造反派」に闘争され、ほとんど死に瀕するほどの暴行を受けた。まさに当代の「冤罪」被害者となったのである。1976 年、毛沢東の死後もまだ彼は毛を信じ敬愛していたが、「罪人」の身であるため毛の葬儀に出ることを禁じられ、肉体の傷より酷く心が傷つく。彼が求め続けたのは、自分の「冤罪」を晴らし名誉回復を果たすことだったが、ついにその望みは果たされず、苦しみつつ逝った（1980 年）。これは「夫（と私）の世代の知識人たちの悲劇を忘れないで！」という叫びをこめた悲痛な追悼文である。

この他、見学名所の「大寨」（文革期の模範農村）訪問記や、大連紅旗造船所の進水式参観などの実態に迫ったルポも面白いが、文革後期の自分の仕事を回想する「編集者の懺悔」は資料としても価値が高い。彼女自身が携わった、文革時代の文学創作の実態が率直に語られており、この時期の文学を知るには必読といえよう。「黙っている」のが不文律の編集者が、ここまで率直に語るのは非常に珍しく、貴重な証言だ。仕事自体は韋君宜にとっては意に反した、辛い仕事だったが。

彼女の文革回憶には、「痛み」ばかりではなく「よいこと」も書かれている。文革後期（73 年ころ）彼女は幹部学校で「指導員」といういくらか職権を持つ身分となり、以前に「冤罪」を着せられた人を再審する仕事を担当した。「（単純な間違いで）少しでも政治的常識のある人なら見分けられる事件をいくつか処理しただけで、私は嬉しくてたまらず、夜ぐっすりと眠れるようになった」とある。文革時にはでたらめな逮捕や監禁が行われていたことは周知だが、後期には（単純な）冤罪が一人の「小役人」の努力で無罪となったケースもあったのだ。生真面目な党员幹部の韋君宜は、無知な軍人たちの支配下で働きつつ、どんなに微力でも自分のできる「よいこと」をしようとした。

最終 16 章は「周揚について」である。韋君宜と周揚との関係は、文芸界で長く複雑な過程を経て続いてきた。初めはただ周揚に大人しく従っていた韋君宜だが、55 年の「丁玲・陳企霞反革命集団」批判や、58 年の周揚「文芸戦線上の一場の大弁論」には付いて行けず、しだいに彼から離れた。驕る周揚の一人天下も、66 年にはついに崩れる。

1976 年四人組失脚後、周揚は涙を流して自分の過去の過ちを謝罪した。韋君宜は『周揚全集』を出版するため周と相談を重ねたが、周の名で発表された原稿や講演要綱の、どの部分が毛沢東の手によるものなのか、周揚が明確に指摘しなかったため、完全な『全集』として出すに到らなかった。

最晩年の周は、マルクス主義も本来「人道主義」を主張しているとの論点を含む論文「マルクス主義理論問題の検討」を執筆発表して（1983 年）、保守派の上層部から批判され、失意に陥っていた。当時この文章をどう思うかと周揚に聞かれた韋君宜は「哲学のことはよく分かりません」と、曖昧な返答をしたのだが、そのことで自分を恥じた。自分はなぜ「あなたへの批判に同意しません」とはっきり言わなかったのか。長年にわたる自己保身癖が沁みついているからか。「十歳も年上の周が無邪気なのに、若い私の方が世間ずれて偽りだった」と、彼女は自分を責めてやまない。

しかし、最晩年の周揚について語る韋君宜の筆致が、自分のとった曖昧な態度への厳しい自己批判の気持ちにひきづられて、いささか甘くなっていることを私は残念に思う。韋君宜は、周揚が死ぬ前に為すべきだった大事なこと——まずは毛沢東について周のみが知っている事を公にし、自分の責任と毛沢東の指示とを区分けすること——をせずに逝ってしまったのを、優しく許し見逃している。これが『思痛録』についての、私の唯一の不満である。

六、後編・韋君宜研究について

上述したが、後編は著者・楠原の論文が第1～5章として収められており、いずれも『思痛録』と韋君宜への敬意と研究意欲のこもった力作である。第1～4章までは、「武漢時期」、「延安時代」、「1950年代」、「文革期」のそれぞれの時期の韋君宜について、社会的背景や政治情勢などを詳細に調べ彼女の環境と突き合わせながら、その著作、思考、行動を記述したもの、第5章は「韋君宜の著作における「歴史」の意味について」と題された論考である。すべてに『思痛録』と韋君宜その人をより深く理解するための知識が詰まっているが、すでに紙数も尽きたので、本書の内容紹介で触れた問題については語るのを省き、『思痛録』に登場しない時期の韋君宜を描いた第1章と、自分の過去の文章を批判する韋君宜の態度を論じた第5章のみを選んで紹介しておきたい。

第1章「武漢時代の韋君宜」で描かれた若い彼女は、『思痛録』とはまた異なる、激情的な姿である。1938年、彼女は最愛の同志かつ恋人であった孫世実（20歳）を、日本の飛行機による銃撃によって失った。「犠牲者の自白」に記された狂乱ともいえる彼女の慟哭の文章は、「乾いた文体」だと評される『思痛録』の書き手の心の奥に、いかに熱くたぎる血が流れていたかを語る。自死を思うほどこの純真な青年革命家の死を惜しみ悲しんだ韋君宜が、彼の死の四十年の後に、「中国の革命の未来に対して純粋な理想を抱いたまま死んだ彼は、むしろ幸せだったのではないか」という悲痛な感慨を書くのだが（「一段補白」）、この慨嘆もまた韋君宜の心奥の熱い血のせいと言えるのかもしれない。

第5章は、韋君宜の仕事の「歴史」としての意味を多角的に論考したもの。特に取り上げられた題材は、大躍進時期の「ある製鉄工場の歴史」という文章についての、韋君宜自身の自己批判である。彼女は1958年、大躍進の掛け声に応え力を尽くして製鉄工場の建設現場で働き、人々の苦闘ぶりと成功の歓喜とを書いたルポを発表した（『故郷和親人』所収）がその後、製鉄の成功はインチキであったことが分かり、建てた工場は打ち捨てられ廃墟となった。韋君宜は58年の自分の文章を、81年出版の単行本『似水流年』にそっくりそのまま再録して、その内容の欺瞞をあばき反省する「タワゴトへの注釈」を付けて自己を批判した。大躍進の嘘っぱちを描く文は多いが、当時の自分の文章を自ら人の目にさらした人は他にいるだろうか。これが韋君宜なのだ——虚偽を書いた自分を、隠さず、許さない。当時は自分が体験した事実だけを書いたはずの自分の文章が、歴史の眼で振り返ると、大きな政治的欺瞞に加担していた「インチキ」であった。韋君宜を苦しめたこの問題について、ルポ原文の引用と解説とを付して論述したこの最終章には、著者の誠実な努力がにじむ。本書を現代中国を知るための必読書として勧めたい。

2016年12月

¹ 高華『紅太陽是怎样昇起的：延安整風運動的来龍去脈』（香港中文大学当代中国文化研究中心、2011年再版）p.655